

2005 年度夏学期 西洋思想史 2 試験問題

門脇俊介

2005 年 7 月 21 日

80 分

答案は片面一枚。

1 次の言葉をすべて用いて、近代哲学に関する適切な文章を作れ。(20)

自然主義、意志、感情、道徳、理性

2 次の文章の哲学的意味を解説せよ。(60)

- (1)「これら感覚が時として誤るものであることを私は経験している。そして、ただの一度でもわれわれを欺いたことがあるものには、けっして全幅の信頼を寄せないのが、分別ある態度なのである。」
- (2)道徳は行為や感情に影響を及ぼすのだから、道徳は理性に起因し得ないということになる。すでに示したように、理性だけではそういう影響力を決して持ち得ないからである。道徳は情念を呼び起こし、そして、行為を生じさせたり、妨げたりする。ところが、理性そのものは、この点についてまったく無力である。したがって、道徳の規則は理性の決定なのではない。」
- (3)「ここに私が指摘しようとするすべての偏見は、次の一偏見に由来している。その一偏見というのは 一般に人々はすべての自然物が自分たちと同じく目的のために働いていると想定していること、のみならず人々は、紙地震がすべてをある一定の目的に従って導いていると確信していること、これである。」
- (4)「現象において感覚と対応するところのものを、私は減少の質料を名付ける。一方、減少の持つ多様なものをある関係において秩序付けようとするところのものを、私は減少の形式と名付ける。・・・現象の形式は、感覚を全体として受け入れるべく心のうちに、ア・プリオリに準備されているのではなくてはならない。」

3 次の文章のうち正しいことがらを述べているものに、そうでないものに×をつけよ。(ただしすべての文章に、あるいはすべての文章に×をつけた答案には、点は与えない。)(20)

- (1)「生まれつきの才能や育ちのよさのおかげで、道徳的によい行為をすることは、「義務に基づいた」好意である。」
- (2)「ニーチェの二世界批判は、「神の死」がもたらした現代精神の分裂に対する批判である。」
- (3)「デカルトは外的事物の存在を、感覚に訴えて証明しようとした。」
- (4)「ヒュームの懐疑主義は、すべてを疑うことによって、結局はわれわれの日常的な常識に立ち戻れなくなってしまった。」